

若年当事者に社会的支援を！ ——20代ゲイ男性からの聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

20代ゲイ男性のライフストーリー。

自分はまわりのみんなとは違うのではないかという違和感を覚え始めたのは、小学校に入学した頃だったと K さんはいう。男の子たちが言葉遣いや遊び方などで「男らしく」なっていき、遊び友達も男女で分かれるというかたちで、まわりがどんどんジェンダー化していくことに、驚きととまどいを覚えた。編み物が趣味で女の子と遊んでいた K さんは、「オトコオンナ」と言われ、いじめられた。小学4年の頃には、自分が異性でなく同性を好きになることにも気づき始めた。しかし、小中学生時代のいちばんの悩みは、「男らしく」なるよう努力してもなれないことであり、みんなが当たり前に行っていることをできない自分を「病気なのか」「宇宙人なのか」と不安に感じた。また、自分がそうした違和感を覚えていることがまわりに知られるのは大きな恐怖であり、そういう自分を親きょうだいや教師にも隠し続けた。学校では、クラスメイトと「距離をとる」ことで自分の身を守った。高校時代には、学内で「ホモだろう」という噂を流され、勉強がまったく手につかず、「時がたつのを待つ」日々を送った。

大学受験に失敗した春、K さんは、「社会見学」として新宿2丁目に出かける。そこで出会ったのは、ゲイであることが知れて家族との関係が悪くなり、ここへ逃げてきて、売春して生活する自分と同年代の子どもたちだった。自分も彼らとおなじ立場にあると感じた K さんは、あらためて大学進学を決意。進学後は、「生きるために勉強する」感覚で猛勉強をし、教員免許を取得した。ほかのゲイの大学生との出会いもあり、インターネットや「友達の友達」というかたちで当事者ネットワークが広がった。大学院進学のさいは研究テーマを「セクシュアリティ」に決めたが、指導教官探しに苦労した。

現在は、大学院博士課程に在籍しながら、大学の教員をしている。「当事者の若い子を助けたい」という思いで研究・教育活動をしている。

キーワード：ライフストーリー、性的指向、ゲイ男性

K さん¹は、1980年に東京都内で生まれた男性（聞き取り時点で26歳）。聞

* ふくおか・やすのり、埼玉大学教養学部教授、社会学

** くろさか・あい、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程2006年3月修了、日本学術振興会特別研究員（PD）、埼玉大学教養学部非常勤講師、社会学

¹ K さんからの聞き取りは、2006年12月18日午後、学生会分館にておこなった。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、および、その時点で埼玉大学教養学部「福岡ゼミ」の学生で、この問題の当事者でもある IY 君。テープおこしは福岡が担当。事例化する作業は黒坂がおこない、原稿を語り手本人に確認してもらった。

き取り時点で、関東地方にある大学の大学院博士後期課程に在籍。かつ、大学の教員もしている。「セクシュアリティ」をテーマに研究活動を継続中だ。Kさん自身、「ゲイ」の当事者である。

3人きょうだいの真ん中で、姉と妹がいる。両親は、都内で店を営み、3人の子どもを育ててきた。現在も、この5人家族で同居している。

1 「男らしくなれない」ことがいちばんの問題だった

1.1 まわりのみんながジェンダー化していくことへの違和感——小学校に上がって

Kさんが、ある「違和感」を覚え始めたのは、「小学校1年生ぐらい」のときからだという。

《Kさん》それまでは、みんな、友達どうしの仲のいい関係だったのが、小学校に入り始めると、友達だった男の子たちが、言葉づかいとかが乱暴になってくるんです。たとえば、[それまでは]男の子でも、下の名前で自分のことを呼んでいたりが、突然、「おれ」とかになるんです。かっこつけて、っていうのもあるんですけど。そういうふうなのが、まわりで支配的になるなかで、それにたいして、ほとんど恐れもたずに、びっくりしたんです。まわりが、なんか、突然、えっ、なんで、どうして、とか思ったのがあったので。

「違和感」は、言葉づかいだけではなく。Kさんは、保育園のころには、いっしょに遊ぶ友達が「7, 8割がた、女の子」だったのだが、小学校に入ると、それが「いけないことのような雰囲気」がでてきたのだった。

《Kさん》サッカーとか、そういう体を使うような運動は、あんまりぼくは好きじゃないので。だから、当時、女の子たちのほうと遊んでたんです。おままごととして、お父さん役をやったりとか、そっちのほうが、おだやかに、こう、一緒に、みんなで和気藹々（わきあいあい）とできるので、ぼくはそっちのほうが好きだったんです。……

ちっちゃいときには、一緒に女の子と遊んでいても、とくに大きな違和感はなく遊べたのに。で、小学校に入ると、なんか、その、女の子と一緒にいるっていうのは、いけないことのような雰囲気が、こう、出てくるんですね。女の子と一緒に遊んでると、「なんだよお、オトコオンナ」みたいなのが始まってきた。

クラスメイトの男の子たちは「外にどんどん出て、運動していた」けれど、Kさん自身は「室内にいて、本を読んでいたとか、あんまりからだを動かさないほうがよかった」。小学校2年生のときには、女の子たちのあいだで流行っていた編み物が、Kさんの「趣味」だったという。「ぼくも一緒にそれを教えてもらって、クラスで編み物をしてるわけですよ」。

《Kさん》当時、性的指向がどうだったかというと、最初の〔初恋の〕相手は、女の子なんです。おんなじクラスの。

だから、なにが自分のなかでの違和感だったかという、〔性的指向ではなくて〕まわりがどんどん男っぽくなっていくけれども——そのう、乱暴とか。でも、それに違和感があつて。自分は、それは、やらなかったんです。でも、そうすると、まわりから「オトコオンナ」と言われるということにかんする、なんか、ひじょうな違和感があつて。どうしたんだろうか、なんかおかしいな、とかって思っていたんです。——だから、いわゆる、あんまり男の子っぽくないような男の子だったんです。

「自分が、どうも男の子を好きになっちゃうって気がつき始めるのは、どのへんから？」という聞き手の質問にたいし、Kさんは「小学校の4年生ぐらい」と答えている。

《Kさん》でも、男の子が、だれか、明確に好きになったかという、そんなことはなくて。その当時も、好きな女の子がいたんです。ただ、男の子も、なんか、目にはつくんです。男の子のほうに、やっぱり——意図が、明確な、なんかがいったわけではないんだけど——、こう、ちょっと意識のなかに入ってくるような存在になったんです。

1.2 まわりと違うんじゃないかという不安——小学校高学年のころ

小学校4年生のとき、家族で都内のべつの地域に引越し、転校をした。「〔新しい学校に〕馴染むのは、ひじょうに苦労した」とKさんは語る。

《Kさん》どちらかという、ぼくは、いじめられる方向に、入ってしまうので。なかなかクラスに馴染めないんです。なるべく、クラスのメインの、力関係の強い人たちとは、こう、かかわりあいをもたないように生活はしてたんですけど。やっぱり、男の子の力がひじょうに強くなってくるころだったので、そのときは、いじめはひじょうにあったので、それがとにかく嫌で嫌でしょうがなかったっていうのがあります。

「ほかの人とのコミュニケーションをとるのに、恐怖感があった」Kさんは、本をよく読むようになった。「本の中に住む人とは対話ができる、といったかんじ」があったと語る。学校の図書館の本を「片っ端から」読み始め、さらには「近くの公共図書館へ行って、児童書関係、ぜんぶ漁って読む」ほどだった。

学校の勉強は「普通程度には」できた。しかし「マイペースというか、期待される反応を返せない」子どもで、「先生から『Kくん、どう思う？』って質問されても、わかんないと〔混乱して〕ボケーッとしちゃう」こともしばしばだったという。

野球やサッカーは「苦痛だったので、嫌だなと思いながら、しかたなく付き合いでやる」程度。友達も多くはなく、「おなじように本が好きな男の子たち2、3人」と、仲良くしていたという。

いじめられるときには「やっぱり、『オトコオンナ』っていうのが、いちばん強かった」とKさんは語る。

《Kさん》〔そのころは〕女の子とは、そんなに一緒にいるわけではない

です。途中から、男の子と女の子は、教室の中でも完全に分離して、仲良くしちゃいけないよ、みたいな文化が生まれてきたので。——だけど、やっぱり、ふるまいが、いわゆる世の中的な男らしくなろうと思っても、どうもそれにはならないので。

だから、性的指向の問題ではなくって、いわゆるふるまい〔が、当時のぼくの、いちばんの問題だった〕。男らしくなりたい、と自分も思ってみたりはするんだけど。まわりに受け入れてもらうために。でも、どうも、それを、頑張っても身につけられない自分がいる。まわりはそれにたいして違和感なく、こう、身につけられるのに、自分はどうしてもできないんだろう。病気なのかな、とか思うぐらいに。でも、病気ではないんじゃないか、とも思ったり。——なんだかわからない、なんかモヤモヤした、ひじょうな不安感があつたんです。

こうした不安感について、両親に相談することは「なかった」と K さんはいう。母親は、『男の子は、強く、スポーツとか積極的にするものだ』っていう志向性がひじょうに強い人」だったからだ。むしろ、母親は、小学生の K さんを運動部に入れようとし、「ぼくはそれを嫌がって、入らなかった。母親と喧嘩した」記憶があると K さんは語る。

父親も、『男らしさ』っていうところにいく、よくいうところの家父長制的な、暴力的な人。子どもを怒るときには、「手が出る」ことがしばしばあつたと K さんはいう。「ぎゃくに父〔から〕も、『男らしくなれ、男らしくなれ』ってさんざん言われてきたので、絶対そんな相談は、やっぱりできない」。

《K さん》〔きょうだいや、ましてや、学校の〕先生には、相談は、ぜったいに〔しない〕。やっぱり、だれにも、それは言えないので。

自分が、ほかの人と違うんだっていうことが少しでも外に出ようものならば、自分の存在が、こう、なくなってしまうような恐怖感があつた。ほとんど、自分は、なんか、宇宙人なのか、ほかの人とは違うんじゃないかと思うような不安感があつた。

小学校 5、6 年生のころ、テレビのニュース番組で、「性同一性障害」が取りあげられていた記憶がある。そのときには「うらやましくって、しょうがなかった」という。

《K さん》「ニュースステーション」かなんかでやってたんですね。「性同一性障害っていう病気があつて……」。それが、すごい、うらやましくて。なんか、自分と似たようなものが、どうも世の中にあるらしい、と。で、あの人たちは、なんか、病気だったっていう根拠がわかった、理由がわかったんだ、っていうことに、すごいうらやましくって、しょうがなかった。——この人たちは、理由がわかった。〔でも〕自分はまだ、わかんない。うらやましいな、っていう覚えが、ひじょうに思い出として、あります。

1.3 いじめから身を守るために「距離をとる」——中学時代

地元の公立中学に進学する。早々に、母親から「バスケットボール部に入りなさい、と言われた」とKさんはいう。

《Kさん》当時の担任が、体育の先生で、バスケ部の顧問だったんですね。体のひじょうに大きい……。家庭訪問、覚えてるんですけど、母親が、こう、「男らしくこの子をさせたいので、バスケットボール部に、どうしても入れたい。先生のところに預けますから、どうか入れてください」って言われて。ぼくは、それがどうしても嫌で、大喧嘩をしたんですけど。「中学校のこの時期になんにもしないというのはマズイから、とにかく、入りなさい」って〔先生にも〕言われて、ムリヤリ入れられて。でも、どうしても、ぼくは、その場には行きたくなくて。とにかく、それを、もう……。しょうがないから、最初は、たまには行ったんですけど。

《Kさん》まわりはもう、ポンポンポンと、かっこうよくできちゃうんですよ。振り向いたりして。でも、ほんとに、つらいなって。まわりがうまいっていうときに、まったくできない自分が、1人だけポツンといるのは、たいへんですね、あれは。

バスケットボール部が「絶対に嫌だった」Kさんは、半年ぐらいたったときに「とにかく、やめます」と主張し、退部することができた。そのときには「なんとかやめたっていう安心感で、ホッとした」心地がしたという。

このころになると、コンピュータに興味をもち始めた。「古いコンピュータを、お年玉を貯めて、買って」手に入れ、いじるのが楽しかったという。

《Kさん》〔当時〕パソコンは、なにができたかっていうと、ほとんどたいしたことはできない。ただ、当時、『マイコン BASIC』っていうパソコン雑誌に、プログラミングコードだけが印刷されたのが、一緒に入ってたんです。それを、ひとつひとつ入力して、「できた!」とかいって、遊んでました。——画面が、こう、できるのが楽しかったんです。たいしたアレじゃないんですけど、なんか、ものづくりみたいな楽しさでしょうか。

で、秋葉原なんかに行ったりしながら、そういうコンピュータが好きな友達、3人ぐらひと一緒〔に〕、なんか、やりとりをして。友達関係、それがありました。

Kさんは、「コンピュータにはまっていた」当時の自分の心境について、「人間はかかわるのが怖い、という恐怖感が強かった」と振り返っている。

《Kさん》とくに中学校になると、思春期に入ってくるので、男の子たちが、性の話を、積極的にし始めるんです。学校にアダルトビデオなんかも持ってきたりして。

中学1、2年ぐらいたったかな。あるとき、自分のカバン開けたら、アダルトビデオが入っていたんです。“えっ、なんでだろう”とか思って。そしたら、隣のクラスの、まあ、力のある男の子たちが、嫌がらせで入れたんです。で、「ああ、Kのカバンに、そんなのが入ってる!」みたいな

のとか、されたりして。……

で、やっぱりあの、「オトコオンナ」って言われることもあって。——中学校のときも、いじめられるような傾向があったんでしょね。そういうのが嫌で。

Kさんの通っていた中学校は、当時は「完全に荒れちゃってた」学校で、「力のある」男の子たちによる暴力事件が、しばしばおきていた。上のような出来事は、学校生活の中で「たまに」おきるくらいだったが、それでも、当時のKさんにとって「いちばん怖いのは、いじめとか、暴力を受けること」だった。Kさんは、周囲の人と「距離をとる」ことで、自分の身を守ろうとしたという。

《Kさん》[なにかされて]「なんだあ」とか「くそっ」とかやると、また、面白がられても困ると思って。とにかく、なんかされても、もう、無視をするというか、やっぱり、ちょっと距離をとるように[していました]。距離をとることについては、もう、長年、小学校のころからずっとやってきたことなので、そういう意味だと、慣れているところで、逃げてました。

《Kさん》自分から積極的に、なにか、発言をするとか、ほかの人とかかわるっていうのは、絶対に、しないようにして。とにかく、なんとか、自分の生活だけ、とりあえずできるようにしよう、って。

休み時間には、本を読んだり、「ボケーツとして、椅子に座って」過ごしたりすることが多かった。「ほかの人とコミュニケーションをとるのは苦痛なので、そちらのほうが気が楽」だったとKさんは語る。

2年生のときには、家庭科の女性教師がクラス担任となり「仲が良く、一緒に生活をしていた」という。「やっぱり、女の先生のほうが気があう」とKさんは語っている。

中学生時代も、Kさんにとって「いちばんの問題は、性的指向じゃなくて、男らしくなれない自分」であった。

《Kさん》性的指向は、ほとんど問題にならないんです。だれかに直接、行動をおこすわけではないですから。表面に出さなければ、とくに問題にならないので、自分自身もストレスにはなりませんね。

いっぽうで、自分はどうも男の子のほうを好きになるみたいだ、という性的指向の「自覚」は、小学生のときよりもずっと強くなってきていた。「自分は宇宙人なんじゃないかな、っていうような思いは、ずうっともって」いた、とKさんは語っている。

1.4 「ホモだろう」と言われて勉強が手につかない——高校3年のとき

都心部にある都立高校に進学する。そこは「制服がない、自由な校風」の進学校で、「ちょっと個性的なひとたちもいた」。それまで「マッチョな、暴力的なのが身近に感じられる」中学校にいたKさんにとっては、「ひじょうに楽しかった」ところを感じられたという。

高校2年のとき、あるクラスメイトの男子生徒と仲良くなる。恋人同士とし

て「付き合っていたわけではない」けれど、それは、「親密な」友人関係だった。Kさんは、この男子生徒に恋愛感情をもっていた。しかし、そのことは、けっして相手に言わなかった。2、3ヵ月が過ぎたころ、相手が「1学年下の女の子と付き合い始めちゃう」ようになり、「[ぼくとの]関係がよくなって、崩壊した」とKさんは語っている。

高校3年の夏をむかえる前ごろ、「当時の番長格みたいなグループ」の男子生徒たちから、「Kはホモじゃないか」と言いたてられ始める。

《Kさん》「Kはホモじゃないか」というのを、なんか、やり始めるんです。学校の、学年の中で[噂を流すみたいにして]。「ホモだろう、ホモだろう」というのを、さんざん、そのころに言われるんです。

ひじょうに焦るのと、あと、腹がたって。“どういうことだ”と思って。こういう状況はどうしたら打開できるんだろうと思って、いちおう、先生には相談をしたわけです。「こんなことを言うのがいる」。そしたら、「でもKはホモじゃないんだろう？」って。“エエッ”とか思って。“そんなこと言われても”とか思って。「そうですね」って、とりあえず答えたら、「本当じゃないんだから、気にしなくていいじゃないか」とか言われて。「そうなんですけどお……」というような反応になってしまっ

Kさんは「打つ手なく」、けっきょく、なにか言われても「無視をする」ことしかできなかった。一部の男子生徒から「ホモだろう」と言われることは、なかなか「消えなかった」。この当時のKさんは「とにかく、時がたつのを待つ」という。

《Kさん》この環境をどうしたら脱することができるだろうかと考えたときに、高校3年生って、受験があるので、12月で[学校が]終わりになるんです。だから、12月になるのを、とにかく待とうと思って。その間隔を、なんとか乗り切ったんです。

このかん、勉強にはまったく手がつかなかった、とKさんはいう。

《Kさん》それがいちばんストレスになるので、とてもじゃないけど、勉強どころではないんです。もう、それをいかに、自分自身の生活、生きるか死ぬか、みたいな状況になるので。とても受験勉強どころじゃなくて、勉強は、ほとんどしませんでした。高校時代は、ひじょうに学力が低くって、大変だったんです。

成績は「学年で下から2、3番目ぐらい」で、「ほとんど大学には行けないような状況」だった。高校3年の冬、大学を受験したが、二部も含めて「どこも受からなかった」という。

2 ゲイ当事者としての世界がひろがる

2.1 新宿2丁目を「社会見学」

高校の卒業式が終わると、「それまで狭い社会にいたのが、自分を縛るもの

がなんにもなく」なり、「ふっきれた」心境になったと K さんは語る。

大学進学は「浪人したって、無理」だと思った K さんは、「就職しようかな」と考え始める。しかし、「就職するにしても、世の中のことを自分は何にも知らない。自分には何があるのか、よくわからない」ことに、気づいたという。K さんは、卒業式の直後から、「社会見学」のつもりで、「おカネかかんない程度に、都内を、いろいろとみてまわる」ことを始めた。そして、そのうちのひとつとして、新宿 2 丁目にも、足を運ぶようになったという。

《K さん》[新宿 2 丁目のことは] テレビで、なんか聞いたことがあった。とにかく、行ってみようかな、と思って。行ったところで、その当時、失うものはなんにもないんです。自分の資格 [= 身分] は、なんにもないですから。だから、なんていうんですか、行っちゃえー、みたいな、見てやれ、っていうような感覚で、行ったんです。……

[新宿 2 丁目に] 入ってくると、なんか知らないけど、声をかけてくる人たちが、たくさんいるんです。「どうしたのー？」とか、「なにしにきたのー？」とか、「いくつ？」とか。いわゆるナンパをしてくる人たちが、ひじょうに多くって。

そのときにびっくりしたのは、高校を卒業するまではなるべく人とかかわらないように、ある意味、ほとんど、学校の中で無に等しい存在になるように、それぐらいに、自分の価値が、ひじょうに、ない存在だって思ってたのに。ここに来ると、とつぜん、声までかけてくる人がいる。そこに、ひじょうに驚きを覚えて。なんだろうって思ったのを、強く覚えてます。

「ナンパをしてくる人たち」がたくさんいても、新宿 2 丁目は、基本的には「商業的な街」だ。おカネをもたない当時の K さんには、腰を落ち着けていられる場所がないように思われた。K さんは「公園だったら、自分も、居場所があるだろう」と思い、2 丁目の真ん中にある新宿公園に行ってみることにした。そこには、K さんと同年代ぐらいの男の子たちが「複数、いた」という。

《K さん》むこうから「なにやってんのー？」って、声をかけてきてくれるんです。で、「なんか、来てみたんだよねえ」みたいな話から始まったりして。ぼくに声をかけてきた、おなじぐらいの年の子とか、あと、もうちょっと年下の子たちもいるんですけど。[その子たちに]「何してんの？」って聞いたら、——あの、新宿公園って、売春の場所なんですね。

新宿公園って、そういう立ちん坊の人がいるところだっていうのは、[あとから知ったことで、そのときには] ぜんぜん知らなかった。ぼくも、そこにいて、声をかけてくる中高年のおじさんたちがいるんです。「いくらあ？」って。なんのことだかよくわからなくて、「なんですかあ？」とか、わけのわからない対応をして (笑)。

K さんは、「ぼくが大きく変わったのは、その公園での、そういった出会い [から] なんです」と語る。

《K さん》そういう中高年のおじさんに一緒にくっついてる、やっぱり、

若い、高校を終わってないような、17〔歳〕ぐらいの子がいたんです。年齢が近いので、しゃべるんです。その子は、地方から出てきた子だったんですけれど。当時、新宿公園の立ちん坊の子たちって、18歳とか、もうちょっと下の子が多かったんですね。

何してんのかなあと思ったら、地方で、ゲイだっていうのがバレて。けっきょく、家族の関係がひじょうに悪くなっちゃったので、家出〔をしてきていた〕。もちろん、おカネなんかないので、まあ、おじさんたちが、若いと買ってくれるので、買ってもらって、そのときのホテル代とかももらったりしながら、生活をしてる子たちが、比較的多かった。

Kさんは、その後も、新宿公園に「2、3回ぐらい」通い、新宿公園の「立ちん坊の子」たちと話をしたという。

《Kさん》いろんな子がいるんです。若い子。やっぱり、暴力を受けた子とか、逃げてきた子とか。そこでの、その、ストリートチルドレン化しちゃっていて〔という状況をみて〕、それにたいして、すごい、びっくりするんです。自分が生活してきて、こういうような環境には、とりあえずなかった。……

新宿で、ストリートチルドレン化している、自分とほとんど似たような年齢のひとがいるということに、ひじょうに驚きを覚えて。“なんだ、これは”と思ったんですね。

同時に、こうした男の子たちの存在を「社会的に、誰も認知していない」ことにも「なんなんだろう、と思った」。Kさんは「もうちょっと大きな問題だったら、絶対に、メディアに取り上げられてもおかしくないのに」と理不尽に思ったという。

こうした男の子たちの状況をまのあたりにしたことで、Kさんは、大学への進学を決意するようになった。

《Kさん》自分としては、ほとんど同い年の、おんなじような環境なんです。ただ、自分は売ってない、というだけ。そういう意味では、なんか、おじさんたち〔と〕の関係で、暴力を受けちゃう子もいたり、やっぱり、その男の子たちの環境、ひじょうに悪かったんです。

その環境のなかで、自分自身もそのひとりだって思うと、“どうしたら、そこから抜け出すことができるんだろうか”って〔考えたんです〕。そのときに、勉強しないと抜けられないな、って。少なくとも、自分は高校を卒業してたので、大学には行ける。高校を卒業してないと、やっぱり、ひじょうに、苦勞しているのを——当時、高校を卒業してない子たちも多かったの——、目の前で一緒にしゃべってる彼は、苦勞しているの。自分はせっかく高校卒業資格をもっている。活かさない手はないな、と思って。で、やっぱり大学に行って、勉強して、そういうのを——その記憶がひじょうに強くて、まさに自分自身の問題だったので——、どうにかできないかなと思ったんです。それで、大学へ行こう、と〔決心しました〕。

Kさんは「人権とか、そういうのを勉強したほうがいいんじゃないか」と思い、法学部をめざすことに決め、予備校に通い始めたという。

2.2 ゲイの友達ができる／「ゲイの世界」の知識にふれる

新宿公園で知り合いになった男の子たちの中に、Kさんとおなじ予備校に通う子がひとりいた。Kさんは、その子と友達になり、そこから、ゲイ当事者たちとの交友関係が広がっていったという。

《Kさん》彼は、医学部をめざして、一生懸命、理数系の勉強をしている子で。で、仲良くなって。ほかにも、予備校にはゲイのひとがいるっていうのを、その子から聞いて。その子とも、友達になって。——だから、ゲイの友達でできたのは、いわゆる世の中的な、一般的な友達っていうんだと、それが最初なんだと思います。その2人から「ゲイの世界のことについて」いろいろと教えてもらうんです。そんな詳しいこと、もちろん、本人たちは知ってるわけではないにしろ。

予備校には、ゲイの先生もいたりして——あのひとは、カミングアウトしてるのかなあ？ いやあ、たぶん、予備校側にはしてないと思いますけど、あきらかに、それはわかるので——、その先生の授業を受けたりとか「していた」。べつに、話しかけたりはしないんですけど。“ああ、ほかにもいるんだな”っていうのが、やっと、それで見えてくるんです。でも、浪人生なので、勉強はやってました。

ひとまわり年上の、ある社会人のゲイ当事者とも、「友達の友達」というかたちで知り合い、仲良くなった。Kさんは、この友人から、「ゲイの世界のこと」について、いろいろなことを教わったという。

《Kさん》たとえば、「新宿公園というのは、売る場所だから、あんまり近寄らないほうがいい」とか。——いくつか、売るスポットというか、コミュニティの人は知っている場所があるんです。そこに若い子がいると、売っているというメッセージ表示になるので、「行かないほうがいい」なんて話を教えてもらったり。

あとは、新宿2丁目は商業的な場所なので、いわゆるお店〔＝ゲイバー〕がいっぱいあるんです。はじめて、新宿2丁目の、いわゆるゲイの人が集まるお店に、その人に連れてってもらうんです。当時、かならず、若い——若いというか、初心者が行くお店が、2つあって。「アーティファクティ」ってお店と、あともうひとつ——あれ、名前が出てこなくなっちゃった。有名なお店なんですけど——、その2つに、連れて行ってもらって。「こういうところが、初心者の子がまず来るところだよ」なんて、教えてもらって。

予備校から比較的近かったこともあり、浪人期間中、新宿2丁目には、友達と何回か遊びに行ったという。しかし、「自分はここのコミュニティの人間だっているように、スツと思えた？」という聞き手の質問にたいし、Kさんは、「いや、それは思えませんでした」と答えている。

《Kさん》なんか、やっぱり、地下活動をおこなっているような、すごい、ダークな世界だっているふうにも見えて。性的なところが特化されているところばかりが目につくんです。行けば、セックスを求める上の年齢の人たちが声をかけてくるし。でも、それは嫌だ、っていうふうに拒絶をするし。コンドームなんかもいっぱいあるし、性的な位置づけばかりが強調されていて、ひじょうに違和感があった。なので、自分にとっては、ここは、なんか違うところだっているという認識が強かったです。

やっぱり、浪人生だったので、大学受験のほうに頭にあったので。〔この時期は〕とにかく受験勉強をしたっていう思い出が、いちばん強いんです。

浪人していた1年間は、不況期だったこともあり、「このあと果たして自分は生きていけるのだろうか」という不安感を、強くもっていたという。

2.3 社会にたいする強い不安——「生きるために勉強する」

翌春、Kさんは、私立大学の法学部に入学する。大学時代は「遊んでる余裕はないだろうと思って、猛烈に勉強をした」と、Kさんは当時を振り返る。

《Kさん》〔学部〕最初のほうは、一般教養〔の授業〕を〔とって〕、もう、片っ端から勉強してました。卒業時には、おかげさまで、300単位を超えて（笑）。とにかく、本を読んで、勉強をしたんです。……

もう、社会生活、社会の中で生きていくためには、それぐらい勉強しないと生きていけないんじゃないかって、不安感が、ひじょうにあるんです。

大学図書館の司書のアルバイトを始めたKさんは、その仕事のためであって、社会科学関係の本を中心に「とにかく読み漁った」という。

学部時代のKさんを勉強へと駆り立てた「不安感」について、Kさんは、以下のように説明する。

《Kさん》こう、バブル崩壊して、不況期なので。まわりも、生活、苦労してたので。……

やっぱり、〔大学の〕先輩たちを見ていると、すごい苦労してるんです。〔就職して〕2、3年ぐらいで、離職率も高いし、いいとこ就職できてるわけでもない。フリーター率も、ひじょうに高いんです。だから、社会にたいする恐怖感が強いんです。やっぱり、ぼく自身の、まわりの、同時期に卒業した友達は、ほとんど、フリーターになっていたりするので。…

〔自分が入学した〇〇大学あたりは〕もう、社会に出るときに、ひじょうに、苦労するレベルなんです。だから、恐怖心のほうが強い。

さらに、浪人時代に出会った、新宿2丁目にいる同年代の男の子たちの置かれた状況も、Kさんに強い不安を抱かせたという。

《Kさん》新宿2丁目で、やっぱり苦労して、売春をして生活をしているっていうところは、衝撃を、ひじょうに大きく受けたんです。で、自分も、

社会の中で生きていくっていうのは、ひじょうに、困難だあっていうような。自分自身の問題なので。目の前の、彼〔の身の上に起こっていること〕は。自分は、そうはなりたくなかったんです。それで、やっぱり、勉強しないと生きていけないなあ、と。そういう意味だと、あの、なんていうんでしょう、生きるために勉強する、みたいなかんじだったんです。勉強しないと、社会の中で、自分みたいなの、生きていけないんじゃないかって不安感が、ひじょうに強いんです。

Kさんは、大学の一般教養の授業のなかに、セクシュアリティをテーマにした半期の授業があるのをみつける。Kさんは、学部1年生のときにこれを受講し、学部2年生からは、その教員のゼミにも出るようになったという。

《Kさん》〔一般教養の授業は、学部〕学生向けの、おもしろく、関心をもたせるための授業。ゲストをたくさん呼ぶんです。たしか、アカーの人が来たような記憶があります。それ以外にも、トランスジェンダーレズビアンの人が来て、お話をして。あと、フェミニストの女性の、セクハラ問題やってるひと。それに、セックスワーカーの当事者が来ました。……

〔ある日〕その授業の先生が、メールをくれたんです、直接。「ゼミに入りませんか？」って、お誘いくださって。——大教室の授業なのに、いつ気が付いたんだろう。

この教員が担当するゼミは、参加学生が「3、4人」で、「性の研究」がテーマだった。ここでは一般教養の授業とはちがいで、ミシェル・フーコーの『性の歴史Ⅰ』など、難解な本を読むことが中心だったという。

《Kさん》なにを言ってるのか、チンプンカンプンで（笑）。2年生では、やっぱり、わかりませんでした。当時、ミシェル・フーコーは基本文献だ、みたいなことがいわれていて、これは読まなくちゃいけない、と思って、一生懸命読むんですけど、わかんないんです（笑）。でも、わからないと、ぎゃくに、わかってやろう、と思ったりするんですよ。

このゼミに参加していた学生は「意欲の高い人」ばかりで、担当教員が学会に行くときには「言われなくても、自分たちの足で〔ついて〕行った」という。

《Kさん》〔学会に行くとき〕なんか、あたりまえのように、難しい話が飛んでるわけです。わからない、っていうところで、ショックを覚えて。これは、勉強をしないと恥をかくなあ、ほかの人とのコミュニケーションもとれない、と思って。

〔自分が通っている〕〇〇大学っていうのは、こう、勉強ができないっていう印象が、自分たちにとって、ひじょうに強いので。〔学会に行くとき〕東京大学の人たちが、いっぱい、いるんですよ。はあー……とか思って（笑）。もう、恥をかかないように、学部のとくに、とにかく、猛烈に勉強するんです。社会科学の基本のキ、みたいなところを、片っ端から。……

〔デュルケムやウェーバーを読んでも、学部生のころは〕なんのことだ

か、わかんないんですよ。でも、とにかく読むんです。大学院に入って、読んで、ああ、こういうことだったのか、ってわかるもんなんですけど。——でも、いちど目を通しておかないと、不安でしょうがない。なんかのときに出たときに、「知らない」っていうのが、すごい、恥なように感じられて。だから、読んだんです。ほんとに、コンプレックスの裏返し（笑）。

2.4 たくさんいるゲイの大学生／友達関係のひろがり

「文献を読み漁る」日々をおくっていた学部生時代の K さんだが、同時に、この時期には、ほかのゲイの学生との出会いもたくさんあったという。

《K さん》学内にも、ゲイの学生はいるので、そういった学生とも仲良くなるんです。友達の友達、っていうかんじでしょうか。「そういえば、あのひとは、〇〇大学の学生だよお」なんていう紹介、されたりなんかして。

このころになると、インターネットを利用してネットワークを広げていくことが可能になった。

《K さん》学部 2 年生にあがったころ、インターネットっていうものが、やっと出てきて、使えるようになるんです。大学にもパソコンがあるし。

当時、〔〇〇大学のある〕××区に、ゲイのサークルができたんです。インターネット上のホームページに、あった。まだ、ほんとに、できて 1 ヶ月ぐらいで、そこで「オフ会をやるので、来てくださいね」っていうのがあって。——初めて、新宿の、飲み屋さんで、集まったのが、10 人ぐらいなんですけど。そこで、いろんな大学の、ゲイの友達と、知り合いになるんです。で、仲良くなるんです。

東京大学にも、ゲイサークルがあって。東大のサークルは、なんか、ちょっと、変わってるサークルで。けっこう、大学の教員、東大の教員にも、ゲイのひとがいて。教員も含まれたかたちで、学生といっしょに、サークルをやってるんです。そこのクリスマス〔のイベント〕のときに行って、東大のひとと仲良くなって。そのなかのひとりと、いまでも親友なんですけど。そのひとに、また、ほかの友達を紹介してもらって。——そういうかたちで、ほかの大学のひととも、友達関係ができるんです。

××区にできたゲイサークルは、どんどんメンバーが増えていき、1 年後には「大学生だらけで、百数十人になっちゃった」という。「オフ会をすると、ギャーッと大騒ぎになって、お店に迷惑をかける」状態になってしまい、K さんは、「大学 3、4 年のころ」に、このサークルを抜けたという。

このように友達関係がおおきくひろがるなかで、K さんは、現在のパートナーと、大学 3 年生のときに知り合っている。聞き取り時点まで、5 年間のつきあいが続いているという。

3 研究・教育の道を歩み始めて

3.1 「指導教官さがし」の苦勞

K さんは、学部 3 年生のときには、「セクシュアリティの研究」をしている

人たちが集まる学外の研究会を探し出し、そこにも参加するようになっていた。しだいに K さんは、大学院への進学を「あたりまえ」と思うようになったという。

《K さん》まわりは、大学院生しかいないんです、基本的に（笑）。で、ゲイの人たちで。まあ、レズビアンの人もあるんですけど。——大学院は行ってあたりまえのところだ、っていう、なんか、わけのわからない環境なんです。もう、大学院、自分が行くの、あたりまえと思ってるわけで。

ところが、大学院への進学には、ひとつ「困った」ことがあった。当時の K さんの指導教員は大学院を担当しておらず、K さんは、指導してくれる先生をあらたに探さなければならなかった。

《K さん》どこに行こうかなと思ったときに、困るんです。〔その研究会には〕いろんな大学の院生がいますが、セクシュアリティの研究するのは、ひじょうに、みんな、苦労しているんですね、指導教官さがしに。ああ、自分も、困ったなあ、と思うんです。

K さんは、指導教員に、フェミニズムを専門にする研究者を紹介してもらった。そして学部を卒業後、K さんは、この研究者が所属している大学の大学院に進学をする。

ところが、修士課程に在学中、K さんは、この指導教官との折り合いが悪くなってしまう。それは、K さんの研究内容をめぐっての意見の相違が発端だった。——K さんは、自分の視点の「オリジナリティ」について、以下のように説明する。

《K さん》たとえば、異性愛の、男性と女性のカップルがいたときに。とうぜん、男性のほうが社会にたいして、ものは言いやすいし、権力関係も、男性のほうが強いですね。だから、それこそ、女の人のほうが、あーだこーだ、文句を言ったりして、まあ、フェミニズムがあるんですけど。

おなじように、じゃあ、同性愛の関係はどうかってことを考えたときに、対等な男性同士であるわけではないんですよ。やっぱり、どちらかが、いわゆる、ゲイコミュニティでいうところの「タチ」であり、「ネコ」であるんですね。「タチ」が、いわゆる、男役です。セックスにおけるか、まあ、普段のその、〔日常の〕場面における、男役。だから、そっちは、マッショで。〔こうした人たちの抱える〕問題は、おそらく、性的指向だけなんです。

じゃあ、「ネコ」のほうはどうかっていうと。ふるまいが女性的なんです。この、ネコの人たちは、トランスジェンダーの、MtF の人とも、ひじょうに近い存在なので。そんなに、実のところ、本人たちは——“べつな存在だ”っていうアイデンティティも、もちろんあるんですけど——けっこう、行き来があるのは、確かなんです。自分にとって居心地のいい場所のほうにいく、っていうかたちで。そんなに、ここが、明確に分かれていないわけじゃないんですね。

だから、ぼく自身も、昔を振り返ると、自分自身が女の子のほうがいいなって思ったときも、やっぱりあるので。思春期を迎えるときに、声が低くなってほしくないな、と思ったので。変声期を越えても、比較的、声が低くならずにいるのは、そのとき、なんかしたわけではないんですけど、でも、やっぱり、声が高くなるように、あの、本人で、意識したのは覚えているので。——だから、MtFの人と、ネコの人と、そんなに大きな差異はないんだろうと思うんです。

さらに、この「タチ」と「ネコ」のあいだには、「権力関係が、明確にある」。ゲイカップルをみると、男役である「タチ」のほうが強く、女役である「ネコ」のほうが弱いのだという。

《Kさん》そういうと、タチの多くの人たち、活動してる人たちが、「根拠がない」とか、いろいろと言われると思うんですけど。でも、権力関係をみると、やっぱり、そちらのほうが強くって。ほとんど、いま、ネコの人たちのほうは、存在がないと思われていて。暴力的な事柄もあるし。〔ゲイカップルでは〕ネコのほうが年齢的に若い、とか。〔異性愛カップルの〕女の人とおんなじような状況に〔ネコの人〕は〕ある。

ただ、ネコの人年齢が上がって、タチになって、若い子といっしょになるっていうことは、あるんです。そうすると当然、〔年齢が〕下の、ネコの子たちのほうが弱い立場になる。だから、そういう意味だと……

なんで、それ、思ったかっていうと。〔新宿〕公園の、その、男の子たちの扱われ方が、ひじょうに悪かったんです。暴力〔を〕していたのは、やっぱり、タチの、中高年層の人たち。ぼくは、やっぱり、親近感もったのは、若い、ネコの子たちのほうだったんです。

しかし、ゲイの問題をめぐる研究の場面では、その担い手も、問題化される事柄も、「タチ」が中心になっている、とKさんは指摘する。

《Kさん》多くの場合、セクシュアリティの研究をしている、研究者もそうだし、アクティヴィストもそうなんですけど、タチなんです、ほとんど。だから、「性的指向が問題です」とか言っちゃうんですけど。でも〔自分は〕、性的指向も問題なんだけど、やっぱり、ふるまいも問題だと思うんです。ただ、なかなか、そういうのって、言語化しにくいところもあって。

研究の場面だと、やっぱり、ゲイの、タチの人たちが、ひじょうに、関心としてもたれやすいし。〔非当事者からは〕なんか、わかりやすいようなんですね。〔でも〕ぼくは、それにたいして、ちょっと、違和感があつて。〔ぼく自身は〕比較的、トランスの人たちとのコミュニケーションのほうが、居心地もよかったし。ネコの人たちとのほうが、居心地がいいんです。

指導教官の先生は、ひじょうに、こっちの、タチの人たちのほうが、頭の中にある。どうもその、トランスジェンダーの人たちとの、こういうようなやりとりが〔ピンとこないみたいだった〕……。〔ネコからタチへ、という〕これが、ひとつの発達モデルで、ここ〔＝タチ〕にいきつくって

いう、モデル観なんだと思うんです。——こう、ネコの人〔は〕、ちょっとウジウジしてるというか、明確にこう、「自分はゲイです」とか、言えるわけではなくって。やっぱり、トランスの人たちとも仲良かったり。「ゲイです」っていうと、なんか、マッチョな、このひとたちの力関係に、巻き込まれてしまいそうな気もして。明確に言いづらい子たちも、多いんです。

修士課程に在籍しているあいだに、この指導教官との関係はますます悪化し、Kさんは、やむなく研究室の変更を願い出た。あたらしく指導教官になった先生は、問題関心も研究方法もKさんとは「ぜんぜん違う」人だったが、「しょうがない」ことであった。Kさんは、半年遅れで修士課程を修了。そのまま博士課程に進学し、現在も在籍中であるという。

3.2 高校教員・大学教員を経験して

Kさんは、修士課程に在学中、1年間、非常勤の高校教員をしている。学部時代、「情報科」の教員免許状を取得していたことで、得られた職だった。

《Kさん》〇〇大学の卒業生っていうのは、基本的に、就職で、ひじょうに苦労をしているんです。自分の足で、どうにかして食っていかなきゃいけない。〔でも〕多くの、セクシュアリティを研究している大学院生が、食えてないのは、目に見えている。先輩たちは、全員、だれも、食えていない。それがわかりきっているのに、なにもしないっていう手はないだろうと思って、その、300単位になったっていうのは、教員免許状を取ったんです。ぼくが卒業するとき、学習指導要領が切り替わったんですけど、そのときに、あたらしい教科ができるっていうのが、わかってたんです。情報科。〔それで、情報科の免許状を取った。〕あたらしい教科なので、採用が大量にある、入りやすいので。

大学院在学中に、とりあえず高校で教えていれば、教歴もつくし。小学校の免許状もあるんです。将来的に、まあ、なんか、食っていくことはできるだろう、と思って。とりあえず、食い扶持だけは確保しとかなないと、こんな、セクシュアリティなんていう研究はしてられないなと思って(笑)。

聞き取り時点では、博士課程での勉強をしながら、同時に、私立大学の任期付きの教員をしている。「情報教育」の授業を担当しており、ここで教えることには「ジェンダーとか、ちょっと絡ませる」程度で、セクシュアリティにかんしては、あまり触れていないという。

さらにKさんは、自身が博士課程に在籍している◎◎大学の、学部での非常勤講師もしている。こちらで担当している授業では、セクシュアリティをめぐる問題にかかわるさまざまな当事者のひとたちを呼び、話をしてもらうというスタイルをとっている。参加学生は30～40人で、「反応は、ひじょうにいい」という。

《Kさん》こちらがびっくりするぐらいに、食いつきがいいんですね。いわゆる、LGBTの当事者が、目の前に出てきて、授業をするっていうのが、

やっぱり……。レズビアンの方と、ゲイの方。あ、ごめんなさい、バイの方はいないですね。トランスジェンダーの方と。あと、HIV 感染の方と、セックスワーカーが、来たんです。そういう方が来て、かつ、話をして、それを学問としてまとめて、っていう授業は〔ほかに〕ない。学生の反応みていると、ひじょうにおもしろく、まあ、関心もってくれて。こんなにも反応がいいものか、と思って、びっくりしてるんです。

この授業をとっている学生のなかに、当事者は「たぶん、いない」。それでも、学外から、当事者が聴講しにくることはあるという。

K さんが、◎◎大学の非常勤講師の卒を得たのには、ある経緯があった。

《K さん》指導教授が授業くれたわけでは、けっして、ないんです。それは、◎◎大学の先生方にも、ゲイの方の先生が、当然、いらっしゃるんです。もちろん、ある程度の高齢の先生なんですけれど。自分自身も、若い頃、ひじょうにその、「オカマだ」って言われて苦労したっていうのが、やっぱりあって。自分自身は、いま、なにも言えないんですけど、そういう状況が嫌だっていうのはあって。どうにかして、その、少しでも〔世の中が〕変わってほしいっていう思いが、ひじょうに強いんですね。なので、やっぱり、そういう授業をやってくれて、まったくかまわないから、やってくれ、っていうふうに言われたんです。

3.3 カミングアウトをめぐる——「あえて言わない」という戦略

聞き取りの最後に、カミングアウトをめぐる、いくつかの事柄を聞いた。「学部時代のゼミのなかで、カミングアウトはしたんですか？」という聞き手の質問にたいし、K さんは、つぎのように答えている。

《K さん》学部時代の指導教員の先生は、完全に、研究者肌の人で。もう、カミングアウトとか、そんなこと、こだわらない人なんです。だから、そういう意味だと、なんにも言わずにいました。

ゼミ生は、少人数なんですけど、いろんな人がいて。ひとりは、ゲイの学部生。もうひとりは、セックスワーカーの方の、学部生でした。女の子。小さなゼミですので、ゼミ生どうしでは、〔お互いのことは〕知っているんですけど。先生にたいしてそれを言うかっていうと、そういうことは言わない。

〔ゼミ生どうしでは〕当たり前のように、なんか、知っている、みたいな〔状況だった〕。ひじょうに仲は良かったので。飲み会とかに行って。

〔それでも、おのおの、自分自身のことについては、とくに〕なんにも言わないですね。言ったところで「へえ〜」っていう程度の話なので（笑）。セックスワーカーの研究をしている本人は、「〔実際に自分でも〕やってみよう、と思って、やり始めたのよねえ」って。「そうなんだ。どう？」みたいな。

その後、研究・教育に携わるようになってからも、カミングアウトはほとんど「していない」。現在、非常勤のほうの授業をやる时候にも、学生たちにた

いして「[自分は] 当事者です、っていうかたちでは、あえて、やらないようにしている」と K さんはいう。

《K さん》導き役がいないと、学生が、どうしていいか、わかんなくなっちゃうんです。「当事者です」っていうと、やっぱり、違う人になるんですよ、学生からみると。そうすると、コーディネーター役がいないと、安心して、学生が、話の先に進んでこなくなっちゃうっていう恐怖感があるので。ぼくは、ぎゃくに、なにも言わないかたちにして [います]。「ずるい」っていう言われ方も、あるにはあるんですけども、ただ……

[当事者のゲストの方のお話は]「批判的なかたちで聞きましょう」と [学生に言ってるんです]。当事者を目の前にして、なんか、たじろいちゃうんじゃないかって、いろんな疑問を、とにかく、ぶつけてください、って。そういう場所として、授業っていう場所で、非日常の場所として、設定してるんだから、っていうかたちで、学生を挑発して、どんどん質問させるようにしてます。

とはいえ、研究者の世界の人たちからは、自分のほうからカミングアウトをしなくても、ゲイの当事者としてみられているように思うと K さんはいう。セクシュアリティの研究をしていて、「当事者の方ですか？」と聞かれることは、ほとんどないという。

《K さん》なんか、あまりにも、ぼくの場合、あたりまえすぎてしまって。ぼくのふるまいが、いわゆる、男らしい男のふるまいではないので。ぎゃくに、あたりまえすぎて、誰も聞かない (笑)。セクシュアリティの研究をしてる人たちは、だいたい、まあ、当事者か、フェミニストなので。「当事者なんですか？」なんていうことは、そもそも、聞かれない。

《聞き手》で、当事者として、見てもらえてるっていうかんじですか？

《K さん》そうです、ええ。ただ、ぎゃくに、むこうも、深くは聞かない、みたいなどころですね。

いっぽうで、「自分がゲイであるっていうことを、隠さなくちゃいけないっていう感覚は、いつまであった？」という聞き手の質問にたいし、K さんは、つぎのように答えている。

《K さん》それは、いまもあります。家族にたいしてなんか、とくにそうですね。家族の崩壊を招きかねないような危機感ですよね、ゲイであるっていうのは。だから、それは言わないし、むこうも、たぶん、聞かないと思います。——感づいているのは、もちろん、あると思うので。

むこうも、そういう雰囲気とか、出さないし。あえて聞かないっていうのが、やっぱり、お互いの、家族の関係性のなかでの、わかるところっていうか。そのへんは、言わないし、聞かない。

K さんは、職場の同僚や大学の友達にたいしても「あえて言わないようにしている」という。それは、「どこでどう、自分の不利益が出てくるのか、わか

らない」からだ。

《Kさん》世の中的に、ひじょうにこう、攻撃をされる的になりやすい。やっぱり、それって、現実問題としてあるので。差別されることとか、不利益をこうむること。言ったことでメリットになることは、おそらく、ほとんどないですよ、ね、「ゲイである」って。職場においてとか、社会生活において。ぎゃくに、不利益しか、ほとんどないのは、見えてるので。だから、言わないです、それは。

研究・教育の場で「あえて、言わない」でいるのは、こうした不利益を避けるためでもある。そして、それは、社会を変えていくためのひとつの「戦略」なのだと Kさんは語る。

《Kさん》ぼくの目的は、あくまでも、当事者の子ども、若い子〔を助けたい、ということなんです〕。ゲイの、マッチョな人たちは、じつのところ、ぼくにとって、どうでもよくって。まあ、どうでもいいっていう言い方はアレですけど。それよりも、やっぱり、家族から逃げてくるような子どもたちとか、社会から疎外されている人たちがいて。やっぱり、ひじょうに、見えにくい存在にあるんですね。

その人たちを、どうにかして、社会システムをつかってサポートしたいと思うと、ぼくも、ひとつの社会資源なんです。社会を動かしていくときの。そのときに、ぼくが「ゲイです」って言うと、社会にたいして発言するときの影響力が、“当事者だから言ってる”っていう位置づけにされちゃうので、ひじょうに、影響力が弱まってしまうかねない。〔だから〕ぎゃくに、あえて言わないで、たとえば教育とか、行政にたいして「こういうようなことが問題になっているので、どうにか〔してほしい〕」って言ったほうが、社会資源として有効に機能するだろうっていう思いがあって。あえて、言わない。

「自分が、こうです」っていうことを、言っていく戦略ではなくって。それよりも、やっぱり、ぼくがひとつの社会資源になることによって、できることがあるだろうと思っているので。だから、あえて、言わない、っていう戦略をとってるんです。

To Help Young Gay People: The Life Story of a Gay Male in His 20's

Ai KUROSAKA and Yasunori FUKUOKA

K says that when he entered elementary school, he started having the uncomfortable feeling that he might be different from kids around him. He felt surprised and lost as the friends around him became gendered: boys became "masculine" in the ways they spoke and played, and boys and girls started playing separately. K was bullied and called "fag" because he enjoyed knitting and playing with girls. When he was in the fourth grade, he started to realize that he felt attracted not to people of the opposite sex but to those of the same sex. However, the biggest concern he had during his elementary and middle school period was that, despite his best efforts, he could not become "masculine." He felt very anxious that he was not like everyone else, wondering "Am I sick?" and "Am I from outer space?" Also, he was terrified that others might find out about his doubts about his sexuality, and he kept this side of himself hidden from even his family members and teachers. At school, he protected himself by "keeping his distance" from his classmates. During high school, other students spread a rumor that "he must be a gay." K could not concentrate on his studies at all, and spent his days "waiting for time to pass."

In the spring of the year that he failed his college entrance examinations, K visited Shinjuku 2 chome as a "field trip." He encountered young gay people of his age whose relationships with their family members suffered when they discovered that they were gay. They escaped from their families and engaged in prostitution for a living in Shinjuku. K thought that he was in the same position as these people and resolved anew to continue his college education. After entering college, he dedicated himself to school work with the determination to "study to live," and succeeded in acquiring teaching credentials. He met other gay college students, and his social network expanded through the use of the Internet and the introduction of "friends' friends." When he proceeded to graduate studies, he chose "sexuality" as his research topic. However, he experienced difficulty finding an academic advisor for this topic.

Currently, he works as a member of the college teaching staff while enrolled in a doctoral program. He researches and teaches with the hope of "helping young gay people."

Keywords: life story, sexual orientation, gay